

## 平成30年度 地域貢献事業活動報告書

1 事業名称	看護大学小児看護学科と教職大学院における学生相互交流事業
2 事業推進者等	(責任者職名・氏名) 教授・桐生徹
3 学外の連携機関等	(連携機関等名) 新潟県立看護大学 (担当者職名・氏名) 講師・北村千章
4 事業の趣旨・目的	学級には、6%は、何らかの特別な支援を要する子どもがいるといわれている。特に医療機関と連携した中で取り組まねばならない子どもが増えてきているが、医療機関との連携を体験した教員は少数であり、特別支援コーディネーターにお任せになっている教員は多い。本学は、教員養成を使命にしていることから、医療機関と連携した活動を学生に体験させる機会となることを目的としている。
5 事業活動報告	<p>1 講演会と看護大学北村ゼミとの合同ゼミ 開催日：2018(平成30)年11月22日(木) 会場：新潟県立看護大学 第2合同講義室 参加者：本学学生約20名、看護大学生約20名、その他約10名 内容：看護大学生や本学学生の研究内容の発表を受け、双方で意見や質問を出し合った。</p> <p>講演会 講師：先天性心疾患患者 猪又竜氏 講演会演題：その子ども大人になる・地域で生きる ～慢性疾患を持ちながら40年過ごして～</p> <p>日程と活動内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>13:00～13:05 開会式</li> <li>13:10～14:45 合同ゼミ</li> <li>14:55～15:00 講師紹介</li> <li>15:00～16:30 講演</li> <li>16:30～16:45 猪又さんと意見交流会</li> <li>16:50～17:00 閉会式</li> </ul> <p>2 全国心臓病の子どもを守る会 長野県支部への参加</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・8月4, 5日, アゼィリア飯綱</li> <li>・11月17日, 長野県こども病院</li> <li>・3月9日, 長野県こども病院</li> <li>・3月21日, 長野県こども病院</li> </ul>
6 本事業で得られた成果	<p>1 講演会と看護大学北村ゼミとの合同ゼミ</p> <p>講演会では、心疾患患者であり講演を積極的に行っている猪又氏を迎えてのものであった。合同ゼミにも参加していただくことで、教育と子どもと学校の関係について、意見交流が行われた。以下は、参加者の感想である。下記の感想にもあるように、学部時代にボランティアや福祉体験を単位として取得しても、大学院ではそれらから遠ざかることで、知識だけの状態に戻ってしまう。機会ある毎に、このような経験を積む過程が必要ではないかと考えている。その点で、今回の講演会は、参加者の胸に残ったものとなった。また、立場は異なるが学校へ通う子どもを見る視点が異なる意見を拝聴する機会として合同ゼミの良さがあると考えている。</p> <p>以下、参加者の講演会と合同ゼミの感想である。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・看護大との合同ゼミで医療と教育のつながりを再認識できました。現場では少なから</li> </ul>

ず心疾患を持つ児童生徒またその保護者と関係を持つことがあります。ややもすると学校側からの目線に対応してしまいがちになりますが、心疾患の方の立場になって考えることの大切さを忘れてはいけないと思いました。

- ・教職大学院の一ゼミとして、看護大と連携関係にあるということは教師としての資質・能力向上のため、また、広い視野で教育を捉えるということについて自覚が芽生え、大変意義があると考えます。
- ・自らの心疾患について講演していただいた猪俣さんは、自分だけでなく社会貢献としての講演をお考えであると感じます。そのような方々とのつながりを大切にすることなど、多くの方や機関との関係を構築できるようアンテナの高い教員になりたいと思いました。
- ・看護大との合同ゼミで教育と医療のつながりの必要性を再認識できました。自分自身も心疾患をもつ子の親として、学校の先生方とできることやできないことを一緒に話し合いながら考えていくことがやっぱり大切なのだと思いました。また、心疾患以外にも学校には様々な困難を抱えた生徒がいます。生徒や保護者の願いを聞きながら、一緒に前向きに考えていける教師でありたいと思います。
- ・今まで送ってきた学校生活の中で、心疾患を持つ方と出会ったことがなかったため、遠い認識でいました。(正確には言葉だけで、実態は知らない程度)直前のゼミでも、新しい言葉ばかりでその遠さは変わらない状態であったのも事実です。しかし、猪又先生のお話を聞くことで、猪俣先生の体験から紡がれる言葉は私にリアルな心疾患像を描かせてくれ、一気に近い内容になりました。その上で、猪俣先生のように学校生活を送られる方も実際にいることを認識し、将来自分に関わる子ども達にも心疾患の子もいるかもしれない、と思いました。まだどう対応すべきか等、具体的なところまで落ちてはいないですが、何も知らないまま出会っていたらその子ども達を傷つけるような対応をしていたかもしれないと思うと怖くなると同時に、今後出会う可能性の為に少しでも近い内容として捉えられる知識を身に付けたいと考えるようになりました。
- ・私にとっては初めての合同ゼミで、自分がやっていることを普段から認識し、理解して貰っている人以外に伝えることの難しさを感じるとともに、心疾患という未知の領域を知ることができ、参加して良かったと思いました。
- ・看護大学ということで医療という新しい視点からの考えや意見を聞き、自分の中で新しい気づきがありました。教師として子どもたちを預かる立場として、授業だけ教育のことだけ知っていればいいということではなく、命に関わることや医学的な知識も知らなければならないと感じました。
- ・医療・教育という異なる分野の交流をする中でお互いに疾患を抱える子供のことを第1に考えていく上で、連携の必要性を感じた。現状、立場の違いからお互いに不満や考えることがあることがわかった。しかし、最終的に患者/児童・生徒であるその子が幸せに生きていくために考えるとお互いに歩み寄っていけると思った。また、私の両親は医療従事者であることから、実家に帰省した際に医療と教育の連携を話した。講演や合同のゼミをしたことによって、さらに深く考える機会につながった。

## 2 心臓病の子どもを守る会への参加

昨年度より参加している「心臓病の子どもを守る会(守る会と称す)」であるが、本年度も参加することができた。病気を持つ親と一緒に過ごすことで、教師となる学生にとって、子どもの後ろにいて、見えない存在の親の考えや気持ちを直接触れあう機会となった。8月の会をきっかけに複数回出席し、親交を深めている。

以下、参加者の感想である。

心臓病は見えない病気であるということは、事前にわかっていた。しかし、参加する子ど

	<p>もが、心臓病の子どもなのか、それとも兄弟なのか、まったく見分けが付かなかった。</p> <p>1 日目は、ホテル近くの公園でアスレチックで遊んだ。いわゆる健常な子どもと同じように見える。しかし、保護者は休憩を促したり、活動範囲を狭めたりと、子どもが無理をしないように配慮しているのが見えた。</p> <p>夜、保護者の談話会では、保護者同士で相談しあっていた。不安を共有したり、同じような経験をした保護者からアドバイスを貰ったりしていた。</p>
7 その他 (成果物等の名称)	特になし